

論文要約

漁撈に関する民俗知の研究

—中国沿海地域における海南島と青島を事例として—

本研究では、中国海洋漁民を研究の主体とし、彼らの漁撈をめぐる「民俗知」を、史料から分析し、また中国沿海地域の海南島と青島の4つの漁村の漁撈活動を事例に明らかにする。具体的には、序章と終章を含め7章から展開する。各章については以下の通りである。

序章 問題提起

第1章 史料からみる「民俗知」

第2章 沿岸漁業にみる民俗知Ⅰ—海南島鶯歌海の定置網漁を事例に

第3章 沿岸漁業にみる民俗知Ⅱ—青島会場の定置網漁を事例に

第4章 沖合漁業にみる民俗知—青島港東のサワラ流し網漁を事例に

第5章 遠洋漁業にみる民俗知—海南島潭門の採貝漁を事例に

終章

序章では、先行研究とその問題点を考察し、本論文の研究視点と研究方法を提示した。史料を基づいて、海洋政策、海洋シルクロードなどの公的な面から中国海洋文化を探究する研究が多い。一方、漁村生活、漁民の習俗・技術・知識などの常民の面からの研究はまだ十分ではない。そのため、本論文は常民としての中国海洋漁民を重視し、彼らが持っている「民俗知」を歴史学、民俗学、資料学3つの研究方法から明らかにする。また、「民俗知」の定義と研究を整理し、「民俗知」についてさらに体系的な研究と明確な定義が必要であることを提示した。

第1章では、歴史的アプローチから、漁撈と航海に関する歴史資料を整理し、「民俗知」に関する資料の概況と性格を明らかにした。中国沿海地域では、長い歴史で様々な漁撈活動とそれに関する技術を発展した。しかし、資料は全体的に少ない。また、漁民のことを全面的な記録がなく、断片的な情報しかわからない。資料だけから漁撈に関する「民俗知」を全体的な把握することは困難である。そのため、民俗学的アプローチから研究する必要がある。

第2章では、沿岸漁業の海南島鶯歌海の定置網漁を事例にあげて、「民俗知」の全体像を捉えた。定置網漁をめぐる、造船、漁具、航海術、出漁、信仰・禁忌それぞれの方面から漁民の知識・技術・技能がみえる。漁船と漁具は魚種、漁場の環境などによって作られた。航海では、現代的な技術と伝統的な技術・知識両方使用している姿が多くみられる。出漁では、漁民たちとの協力（杭を設定するとき）と「流水」などの海況の把握（魚を

とるとき)が必要である。「流水」(潮流)の知識は以上の一連の行動に運用され、また漁民の日常生活(民歌・ことわざなど)にかかわる。

第3章では、青島会場の定置網漁を事例にあげ、鶯歌海の定置網漁と比較した。具体的に、沿岸航海術と漁具・漁法の2つの方面から展開した。最後に、同じ魚種でも、自然環境によって、「民俗知」の相違性を提示した。

第4章と第5章では、異なる漁撈の種類から「民俗知」の具体的な内容を検討した。

第4章は沖合漁業の青島港東地域のサワラ流し網漁を事例にあげ、「試水砵」という道具をめぐる展開した。サワラ流し網漁は固定している定置網漁と違い、流動的に魚をとる漁である。その魚種では、固定している漁場を精確に探すではなく、流動している漁場の環境を判断することが重要である。また、青島地域では霧がよくたつため、霧の天候の航海安全を重視している。以上の2つの場合では、「試水砵」という道具を使用しなければならない。

第5章は遠洋漁業の海南島潭門の採貝漁を事例にあげた。遠洋漁業では、航海術が特に重要であり、本章は航海術を中心に展開した。最近海南島の「更路簿」という航海書についての研究が盛り上げた。本章は「更路簿」などの文献資料とフィールドワークの結果から海南島の漁民の伝統的な航海術が豊かな知識と経験をもっていること、特に船長の経験と「勘」が重要であることを指摘した。

終章では、以上の6章の成果から、漁撈をめぐる「民俗知」の内容と特徴を明らかにした。漁撈をめぐる「民俗知」は、断片的な知識ではなく、道具づくり、航海術、漁法、日常生活、信仰の一連の活動を含まれる。空間的には、海だけではなく、陸地の資源(材料)・山(標識)を含み、漁民が生活している空間の自然とかかわる。漁撈をめぐる「民俗知」は自然環境への適応、漁撈の種類による認識の相違、近代科学的思考との違いの3つの特徴があることを明らかにした。

最後に、「民俗知」を以下のように定義した。民俗知は人間が生産活動の過程で、自然・社会との付き合いから生まれた経験である。その経験は知識だけではなく、技術、技能、信仰を含み、日常生活に大きな影響を与える。また、民俗知は地域の文化の根と考えている。

神奈川大学大学院
歴史民俗資料学研究科
歴史民俗資料学専攻
 俞 鳴奇
学籍番号：201770205